

一般財団法人生涯学習開発財団主催 シンポジウム2013

「多元的共生社会におけるコミュニケーション力」

第1回『これまでの学びとこれからのコミュニケーションをつなぐ見取り図』

講演 荻宿俊文（青山学院大学教授）

日時：2013年3月2日（土）

会場：東京大学 福武ホールラーニングシアター

一般財団法人生涯学習開発財団が主催する全3回のシンポジウム。これからの社会を生涯学習社会として位置づけ、その有り様を“コミュニケーション”“アート”“学び”の3つの視点からあきらかにしていく試みです。

第1回目は、青山学院大学教授荻宿俊文先生が“コミュニケーション”の切り口から、「見取り図」を交えて多元的社会をどう捉えていくかを、参加者とのイメージの共有を大切にしながらお話しくださいました。

Part1

「これまでの学び」が抱える不可避と不可能

3つのキーワード「学び・コミュニケーション・見取り図」

荻宿先生は正面の大きな画面に映し出されるキーワードにそって、今回のシンポジウムを貫く3つの視点を話し始めました。「“これまでの学び”とは振り返ること、“これからのコミュニケーション”とは関連づけること、そして“見取り図”とは把握し直すことです。そして大切な事は学びやコミュニケーションを単純にマルかバツ、善悪で考えないこと、二元論的にならないこと。単純と複雑の端境の考え方をこのシンポジウムで経験して欲しいと思います。」

「学びとコミュニケーションの見取り図を参加者のみなさんのフィット感あるものとして作ってみました。」スクリーン画面には説明と同時に見取り図が描かれていきます。1960年代から2010年代を右肩上がりにナナメ軸として『学びが学校だけのものから社会にあるもの』、タテ軸には『これまでの知識の獲得から、これからの知識獲得

+意味生成』、ヨコ軸に『これまでの一元的なコミュニケーションから、これからの多元的なコミュニケーション』、そして『1980-90年代「学び論」学派と1990-2000年代企業研修の勃興』をつなぎ合わせて見取り図が完成しました。「この見取り図を解説していきましょう。」

学びとコミュニケーションの出会い

文部科学省は『人々の共同生活を豊にするために日常のコミュニケーションから協同的な関係を築くよう努めることが重要である』と定義しています。このことを荏宿先生は、ウェブページをその場で検索しながら実際に見せていきます。このようにシンポジウムではありますが、大学の研究室で議論をしているようなリアリティを持った講演が荏宿先生のスタイルの醍醐味でもあります。参加者が自分ごととして知的生産をする場合の方法論もさりげなく盛り込んでいくのです。

「知的な生産は地道な積み上げ。自分の言っていることが自分のセンスと感とかではなくてちゃんとどこに立脚するのかということや常に意識してどれがクリティカルにされた場合どこまで妥当性があるのかということをやっていくのがよい」とのアドバイスも。そして見取り図にある『これからのコミュニケーション』を考えた時に、『日常のコミュニケーションから協同的な関係を築くというものがコミュニケーションである』という方向なんだということや会場と共有しました。

知識の獲得と意味形成

今回の見取り図ではタテ軸となるのが『知識の獲得と意味形成』です。

知識の獲得とは、学習者は自分1人、自分の頭で知識を獲得していくもの。

得られるものは「正解」で、評価は獲得した量、つまり教え手側の意図の達成度合いとなります。だからテストで点数を付けるそうです。

「そのときに、正しい先生は子どもが聞いていないからその子ができないんだということではなく、自分の教え方がどうだったかが子どものテストに現れてくるということを知っている。ただ、うまく教えていないということが悪いことではない。また教えればいいのだから。ただそれに気がつかないと困るのです。自分が教えたはずなんだけど、まだみんなよく分かっていないんだと気づくことが大事です。」

意味生成での学習者とは『自分と他者＝共同体』です。コミュニティを前提とします。

1人でもできますが、教育学でのコミュニケーションとしては、コミュニティに参加することで学習が成立するものと考えます。

得られるものは『納得解＝経験した質』。正しい答えは得られないかもしれないが、共同体の中で話し合ったり一緒に作ることを通して意味を作り出ししていくので、そこには『納得した答え＝納得解』がうまれるのだそうです。

「学び手側が実践にどれだけ納得しているのかは、学び手側の『実践納得度合い＝経験の質』で測るのです。ここで今日みなさんに一番分かっていたいただきたいのは、この意味生成の評価をどうするのかをちゃんと考えましょうということ。つまり経験や質をどうやって考えたら評価になるのかということ。それは教え手側の都合ではない、学び手側に何が起こったのかということをちゃんと見ることです。それが重要。熟達した先生や、講師の方々はこの知識の獲得と意味形成がちゃんと混ざり合っています。」

今までの話から、これまでの学びは、『知識の獲得と意味の生成を共生的な関係ととらえる。』これからのコミュニケーションは、『日常のコミュニケーションから協同的な関係を築く』ことが普遍的な価値として定着しそうだということが分かりました。ここで荻宿先生が現在の問題点を指摘します。

「共生や協同が『避けて通れない＝不可避』であるが、ほんとにできるんだろうかという難しさにたじろいでいるのが現状。明るい未来があるかどうか分からない。分からないけれどもそれをどのように作っていくのか、それを誰かに任せるのではなくて、自分がそれにどのように関わっていくのか、自分としてはどの部分ができるのかを考える必要がある。」

また荻宿先生は「この『これまでの学び』を『教育学』と読み替えていくと、二元論の争いが多すぎた学校教育を巡る政治的な対立が、複雑で繊細な教授・学習の場を単純化（善悪）で見えてしまうクセがついてしまったように思う。」とも指摘されました。

さらに、学校教育を考察していくと浮かび上がってくる「学校人間主義」という課題が、教師の人間性が重要視されることにつながると荻宿先生は言います。「時代を反映したかつてのテレビドラマのように人生を投げ打ってこどものために尽くすことが善なるものであるだけでなく、知的好奇心を持って学ぶということがいかに楽しいことであるのかを伝えて行くことが重要であり、私たちは知識として、まず学び

手側の『実践の納得度合い』、学び手に何が起きているのかということを見ると
うことが大事なんだということを知るということが大切であるのです。」

part1 終了